

当報告の内容は、著者の著作物です。

Copyrighted material of the author.

タイトル：「前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討」（平成 24 年度第 1 回研究会）

日時：平成 24 年 6 月 23 日（土曜日）午後 1 時半より午後 6 時

場所：東京外国語大学本郷サテライト 7 階会議室

1. 太田 信宏（AA 研所員）「前近代南アジアの社会集団——研究の成果と課題」

（1）共同研究の趣旨

前近代南アジアの歴史は、国家体制、政治事件を中心として叙述されることが依然として多い。本共同研究では、社会、特に、社会的諸集団のあり方に焦点をあてて、従来とは異なる前近代南アジアの歴史像を構想したい。近年、植民地期に直接的に先行する時代におけるカースト的集団に関する論考が比較的多く発表されている。その一方で「近世」以前に時代を遡れば、カースト的とは言い難いさまざまな職能的集団が、中世初期以降、刻文などの同時代史料に登場する。近世期にカースト的な結合に基づく集団が卓越するようになったとしても、それ以前には、あるいは、それと並んで、社会的結合の多様なあり方が見られたのである。全体社会を構成する諸集団の内的結合のあり方、集団相互の関係のあり方、集団と国家の関係、これらの変動をたどることで、南アジアの新しい前近代史像を描くことを期したい。なお、本共同研究での「中間的諸集団」は、国家と個人・家族の間に形成された多種多様な集合体を幅広く含む。一部の集団は、国家、さらには南アジアという地域の枠を越えて活動を展開させたが、そうした活動にも着目する。

（2）社会集団研究の成果と課題

前近代南アジア史研究が国家体制と農村社会の解明を二大課題として展開される状況が長く続いた中で、両者を媒介する「中間的諸集団（Intermediate groups）」に着目したベイリの研究がもつ意義は大きい。過去四半世紀、さまざまなカースト的、職能的、地縁的集団、教団・教派などの宗教的団体、さらには、「部族的」集団を対象とした個別研究が発表されるようになった。特に最近の傾向として、集団の内外の「実態的」な関係を分析するよりも、集団をめぐる表象、集合的記憶、アイデンティティを中心的に論じたものが少なくない。その一方で、特に近世期のカースト的集団に関する論考では、カースト的紐帯・アイデンティティの強化・顕現が、近世期以降、特に、都市部において、商品経済の一定の進展のもとで見られるようになったことを指摘する研究も見られる。農村部における地縁的集団としては、村落を超えた地域社会の重要性が認識されるようになり、その社会を支えた分業体制の検討も進んでいる。モノ・サービスの提供を権利として行う各種職人からなる分業体制が成立する条件・背景として、商品経済の一定の進展が挙げられることもある。こうした論考は、その当否についてはさらなる検証が必要であるが、集団内外の諸関

係の形成と展開を、局地的、地域的、世界的な文脈・状況（他の集団との関係を含む）の中で捉えることの重要性を示唆している。そうした把握を進める手掛かりのひとつとして、比較史の手法・視点を考えることもできよう。また、集団という安定的、恒常的な形態・姿をとらない（あるいは、とるまえの）より緩やかな人と人との結びつき、ネットワークを紡ぐ個人の活動にも着目し、集団を相対化することも求められるであろう。

（3）個人的課題

デカン高原南部の工人集団（ラタカーラ、ヴィシュヴァカルマ、パンチャーラ、カンマーラなどの名称で自他によって言及された）に着目し、中世から近世という長い時間枠のなかで、彼らの集団的結集のあり方とその歴史的变化を検討する。特に、分業体制との関わりや、集団独自の僧院（マタ）組織の発展、彼らの身分意識に着目する予定である。